

個人の感情制御方略の選択に 家庭環境が及ぼす影響について

○平部あずみ¹
(¹広島大学教育学部)

問題

本研究の目的は、個人の感情制御方略の選択に、家庭環境が及ぼす影響について検討することである。感情制御とは、個人の目標を成し遂げるため、特に集中的で一時的である感情的な反応を観察・評価し、そして修正する外的および内的なプロセスのことである(Thompson, 1994)。感情制御の研究では、外的・内的観点で大別したもの(Tanya, 2011)、対人的・非対人的観点で大別したもの(Einat & Simon, 2016)など、様々な観点から行われた研究が存在する。

中学生において、シンナー乱用経験、喫煙経験は家族との夕食頻度に関係(和田, 2008)や、12~17歳の子どもがいる家庭において、家族で夕食をとる機会の少ない家庭の子供は、そうでない家庭よりもタバコ、大麻、アルコールの経験傾向が高まる(Joseph et al., 2009)など、家庭環境と感情制御、特に人ではなくモノで感情制御を行う非対人的感情制御の関連を示唆する研究はなされている。

本研究では、家庭環境が良好ではない場合は非対人的感情制御が行われると仮説を立て、家庭環境が、個人の感情制御方略の選択に、どのような影響を及ぼすのか検討していく。

方法

参加者 大学生27名(女性16名, Mage=20.3歳)。
手続き 質問紙はA冊子, B冊子の2冊からなる。それぞれ、1冊につき1つの感情を場面想定法で想起させ、それに関して、対人的感情制御、非対人的感情制御についての質問に回答させた。また、A冊子にはフェイスシート、B冊子には家庭環境を測定する指標を掲載した。

各質問紙で想起させた感情だが、A冊子については、シャーデンフロイデを用いた。これは、人の不幸は蜜の味、日本において”いい気味だ”、様を見る”と表現される(澤田, 2008)。また、B冊子については、ルサンチマンを用いた。これは、上位者・支配者・強者に対し、現実の行為において反抗できないために持つ怨恨(菅野, 2012)であ

る。また、対人的感情制御の測定には、Cheung et al., (2014)のemotionshipsの手法に則り、分析に用いる指標を算出した。非対人的感情制御の測定には、勝谷(2006)の3因子からなる非対人的対処行動項目を用いた。家庭環境の測定については、Aron et al., (1992)のIOS尺度を用い、家族の構成員との心理的距離を測定し、その平均と分散を算出することで、分析に用いた。

結果

IOS平均とIOS分散(いずれも中心化)を説明変数とし、感情制御(対人的・非対人的)を目的変数とする重回帰分析の結果より、家庭環境と非対人的感情制御との間に有意な結果は見られなかった。これは仮説を支持しない結果であった。一方で、対人的感情制御と家庭環境の間には、有意な結果が見られた。これをFigure 1.に示す。

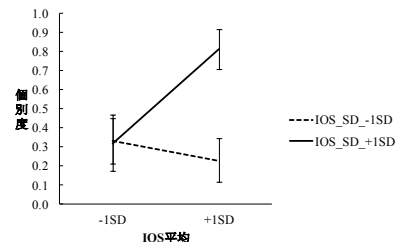


Figure 1. IOS平均とIOS分散の交互作用

単純傾斜検定の結果、IOS平均が高く、IOSの分散が大きいとき、emotionshipsの個別度(1つのシナリオでのみ挙げられた人数を合計人数で割る)が上がる、つまり家族との心理的距離が近く、家族内で心理的距離にばらつきがあるとき、話したい人の個別度が高いことがわかった。

考察

重回帰分析の結果と、話したい人として、友人が最も多く選択されるという対人的感情制御の項目の回答を併せて考慮すれば、家族構成員との心理的距離が近くとも、家族内に1人でも心理的距離の遠い人がいれば、家族ではなく、家の外に存在する親しい人、特に友人に対する対人的な感情制御を選ぶと考えられる。なお、当日は大学生327名に行った研究2の結果も報告する。